

技術以前の技術

大人数の会の山行では複数のパーティーを組む。みんなと一緒にスタートしても、パーティーによって、先頭と最後のパーティーとの時間的開きが出ることも多いが、先に降りてきた仲間たちは後から下ってくるパーティーをどのように迎えているだろうか。自分の着替えや片づけに一生懸命になって、あるいはすでにくつろいでしまって知らん顔、ということはないだろうか。最後の一人が到着する、そのひとりを確認するまでは、山行は終わっていない。

パーティーのリーダーも自分のパーティーだけは全員降りてきたから、それでおしまいになっていないか。そうではなくて、他のパーティーも揃うまでは緊張を解かない、というのが、リーダーとしての基本「技術」のような気がするのだが。

今回は「技術以前の技術」について考えてみたい。



晴れていれば、のんびりできる山だが

私の登山

12

ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

人を待たせて平気なメンバー
待たされても平気なリーダー

れるというのわかる。使う前もタオルにくるんでおく必要があるだろうか？そういう手間を省けばもっと早く取り出せるはずだ。準備と手順の問題である。アイゼンケースを再びザックに入れ、ザックの口を絞って雨蓋を乗せ、バックルをはめる。風雪の中で、モノが飛ばないように装備をザックの中に突っ込んでおいて、次の作業をするのはいいのだけれど、いちいちきちんと絞めてバックルまでかけてからでないと次の作業に移れない。途中で取り出したモノや入れ忘れたモノが出てきたら、またザックの開け閉めをくり返すことになるのだが。この要領の悪さも時間を食うモトになる。



降雪の中を下山（鈴鹿・藤原岳で）

やっと、アイゼンの装着にかかる。一本締めとか二本締めとかいうアイゼンのバンドはとうの昔に博物館行きになってしまって、ワンタッチ、セミ・ワンタッチという金具、もしくは金具とベルトを併用した、容易に早く確実に装着できるタイプがほとんどだが、それでも手袋をはめたままではつけれないで素手になっているひと、左右を間違えるひと、ベルトの締め方留め方がおかしいひと…結構多いんだ、こんなひとたちが。習熟できていないと時間がかかる（おい、まだかよ）。

やっとアイゼンがついた。ザックカバリーをかけて、ザックを背負う。ウエストベルトのバックル、チェストのバックルをはめた。今度は手袋のアウトターをはめて、と（おい、そんな歩きながらでもできるんじゃないか？）。最後にピッケルを持って、「おまたせしました」ということになるが、これだけの手順が終わらないと歩き出せないメンバー、黙って、それだけのことが一通り終わるまで待っているリーダー、こういう関係が当たり前のようになっていくパーティーが多すぎる。

山行中の動作や行動を見て…

2月だというのに、登山口付近は雨。それでもみんな黙々と出発準備を始める。ただ、なんでこんなに…と思うくらい時間がかかる。こんな時にはさっさと動いた方がいいのだけれど、リーダー連中はどう思ってるんだろう。

「おい、早くパーティーごとに集めて、出られるところから出るよ」声をかけたら、やっと動きはじめた。この日は30人、5パーティー。私は全体の最後尾につく。

歩きはじめてすぐ、ひとつのパーティーの足が止まった。メンバーのひとりが邪魔になったストックをザックに取り付けようとしている。見ていると、後ろのメンバーがザックカバリーの片側を外して、ザックのサイドに差し込んでやろうとしているのだが、立ったままなのでふらふらと動いてなかなかうまくいかない。

「ザック下ろして、自分でやったら」と、思わず口を出してしまった。ザックカバリーを外し、ザックの横にストックは固定できたが、今度は折りたたんだストックの長さがザックの丈より長く、ザックカバリーがうまく被ら

ない。ザックカバリーなんてとってしまえばいいのに。

出発前にすべきことを途中でパーティーの足をとめてやる。余分な装備があつたり、使い慣れていなかったりしておそろしく時間がかかった。ひとつひとつの動作が遅い。他のパーティーはずいぶん先に行ってしまった。

進むにつれて気温が下がり、雪道はがちがちに凍って、靴底が滑るようになってきた。雨は雪に変わっている。そろそろアイゼンをつけよう。

ザックを下ろし、アイゼンを取り出してつける。立ち上がって、さあ出発、これだけのことだ…。

まず、手袋のアウトターははずす。アウトターを脇に置いて、インナーだけになった手でチェストベルトのバックル、次いでウエストベルトのバックルを外す（休憩してザックを下ろすときも、出発の際にザックを背負った時も、立ち止まってこの作業が済まないといけない。ザックを下ろし、ザックカバリーを外して、ザックの口を開き、アイゼンケースを取り出す。ケースの中のタオルにくるまれたアイゼンを取り出して雪の上に置く（使ったあとに濡れたり泥で汚れたりしたアイゼンをタオルでくるんでケースに入

かくて、人を待たせて平気なメンバー、いくら待たされても平気なリーダーと

で、どんな風や雪や雨の中でも自分の用意が終わるまでパーティーの足を止めたり、仲間を促すことなく立ち止まっていたりすることにまったく危機感も罪悪感も覚えないままの登山者の一群がでかあがる。

リーダーというのは、ただ、パーティーの後ろについていくだけではない。天候の変化や時間の推移もみて、メンバーの尻を叩くことも役割のうち「技術」のうちである。

この日、山頂周辺は風雪とホワイトアウトで、早々に下山したが、一緒に登った仲間たちがどれほどこの天候の変化とパーティーの動きに危機感やコ

ワさを覚えていたのだろうか。

私はそれほど気が長くはないし、命も惜しい。装備をすぐに取り出して使えるような工夫、何をどのようにすれば、少しでも早く次の行動に移れるかを考えたり、実際に無駄を省くように準備することは大事である。日常の山行の中で、一つ一つの動作や行動などをあたりまえに素早く的確にできる技術、技術以前の技術とでもいうべきことをできるようにするトレーニングが必要だと思う。自分の置かれている客観的状況「いま、そこにある危険」を知ることができるともたぶん、その技術のひとつではある。

みなさんの会の山行中の行動はどうだろうか？

ヘルメット

私は帽子とかヘルメットとか、頭に被るものあまり好きではない。でも、岩登りではヘルメットがないと、怖くて取り付くことができない。落石に遭ったこともあるし、立ち上がろうとしてかぶった岩に頭突きをかましたこともある。沢で思いっきり滑って岩盤の上でひっくり返ったこともあるが、ヘルメットのおかげで助かった。好きではないけれど、緊張感を高め、安心感を与えてくれる大切な装備のひとつだ。

最近、剣や穂高などを歩いていると、ヘルメットを被っている登山者がよく目につく。かつてはクライマーの代名詞だったが、遭対協の「着用奨励山域」の呼びかけや山小屋のレンタルが功を奏しているのか、一般登山者も被る人が増えた。この「奨励山域」の呼びかけに「他の山域においてヘルメットが不要という主旨ではない」とあるとおり、これだけ登山者が増えると、ひとや石が落ちてくる可能性も山域も広がる。事故が起きやすいのは岩場に限らず、「まさか…」とか「こんなところで…」という場面である。登れないとは思わない、落ちるとも思わない、でも…ということだ。昨年御嶽が噴火したが、山小屋に避難した登山者たちは小屋に備えてあったヘルメットを被って下山した。足りずに鍋を被って下ったひといた。軽量でリーズナブル、ファッションなヘルメットが出回り始めた。ベーシックな装備としてみんなが当たり前のように携行すれば、もっと山での死傷事故は減るかも知れない。